

第二回

「陸」全国俳句大会特集

平成十八年九月十七日～十八日

# 「陸」全国俳句大会報告（二日目）

大泉 秀明

平成十八年九月十七日～十八日、第二回「陸」全国俳句大会が宮城支部の担当で行われました。

今回の参加者は六十六名、遠くは大阪、三重、愛知、長野、兵庫からご参加をいただきました。

「陸」誌に掲載された案内文を改めて読んでみる。

「蔵王連峰の豊かな自然に囲まれたリゾートホテルを会場に本年度の全国大会を開催します。蔵王のシンボルでもある火山湖、お釜の神秘的な色をお見せしたいと思ひます」とある。

十七日に予定した吟行会の日程は、曇天も考え二通りある。

晴天の場合、蔵王エコーライン、お釜、駒草平、不動滝。

悪天候の場合、中将実方の墓、道祖神社、二木の松、甲

冑堂。

私も含め多くの方が蔵王のお釜を楽しみにしていたと思うが、空は今にも降りだしそうなどんよりとした雲に覆われ、蔵王のお釜を断念。集合場所の仙台駅の西口よりバス二台に分乗、稲村茂樹氏の明るいいいさつとともにバス南下、一時間ほどして最初の吟行地、中将実方墓である。十八年ほど前に東北大会で訪れ、その頃に比べると随分整備されたと聞く。実方の墓を囲む「陸」俳句会の彩る傘にどこか明るさを感じた。

「陸」一行のバスは道祖神社へ向かう。雨はまだ降っているが風は弱くなったようだ。秋霖の音無く包む道祖神社の境内を散策、光も差し美しく感じられた。

次に向かったのが二木の松である。天候の関係もあり、車中より停車しての吟行となった。

甲冑堂への到着時には雨も上がり、明るさも増してきた。



実方の墓入り口にある芭蕉句碑  
(奥手の自然石)



二木の松 (武隈の松)



かたみのすすぎ  
(実方の墓)

甲冑堂の中で私の眼を引いたのは孫太郎虫である。大きさは十センチを超え、本当にこの虫を食べたのか信じられない。やはり薬と思わなければ口には入れないだろうと思う。この度の吟行地だけでなく、歴史的名所、旧跡は全て整備され、観光地化しているという。「当時のままを残してゆくのが本当の整備ではないか」と大類つとむ氏が漏らしていたのが心に残っている。

宿泊場所の「宮城蔵王ロイヤルホテル」へ到着。全員の集合写真を撮影後、懇親会会場へ。投句用紙が入場券になっており入口で投句。懇親会は初めて参加という方の自己紹介なども聞くことができ、終始楽しい懇談となった。「陸」全国大会、東北大会は「陸」の祭のように感じ、私は楽しみにしています。次回もまた参加できることを楽しみに十七日の報告を終わりたいと思います。

# 「陸」全国俳句大会報告（二日目）

佐藤 禎子

## 開会宣言

稲村茂樹大会実行委員長

おはようございます。台風十三号は日本海の方へ抜けていったようです。ただ秋雨前線の影響で東北はまだ雨が続きそうです。早く前線が去ってくればいいと思っております。

それでは第二回「陸」全国俳句大会を開催いたします。

## 開会の挨拶

小菅白藤同人会会長

みなさんおはようございます。昨日までは町山会長さんで今日から私がと思っておりますが、ゆうべは状況が変更まして、まごついた挨拶をしてしまいました。

今日の全国大会は認識を新たにして会長という立場で対処していかねばならない。私は会長の柄でもないことは重々分かっておりますが、引き受けたからには町山前会

長、スタッフの方々のご援助をいただきながらつとめてまいりますと思っております。

本日、第二回全国大会は、地元宮城の方々の大変なご努力と、各地から馳せ参じた皆様のおかげで盛大に開催することができまして、中村主宰も大変喜んでおられます。全国からすばらしい句が集まりましたが、これからも自信を持って進んでいきましょう。そして個性的で新鮮な句を作って「陸」を盛り上げていきましょう。

以上、私の新会長としての所信の一端を申し上げます。簡単ですがこの辺でしめくりたいと思います。

## 主宰挨拶

中村和弘主宰

ゆうべは、よく眠れた方もそうでない方もいると思いますが、今日は楽しい会にしていきたいと思えます。

藤田湘子先生が言っておられますが、俳句を長くやっていると「俳句めがね」という、一つの概念ができてきます。こういうめがねを外して初心にかえって作るということが大事だと思います。いつも新しいものを求めていく心が大事だと思います。

今日は、そういう作品がどのくらいあるか楽しみです。それでは進行の方、よろしくお願いします。

### 応募句入賞発表

麻田すみえ特選

盲導の郭公チャイム雪しまく

外崎 光秋

浅見玲子特選

青大将山脈のごと通りけり

石川真木子

泉風信子特選

南瓜一つ這ひ出てをりぬ開拓碑

山本 一糸

太秦女良夫特選

異次元に攫われたくて霧の野へ

小竹ヒサ子

大石雄鬼特選

水蜜桃剝けば鳥取砂丘かな

金子 千侍

大類つとむ特選

スイッチの汚れやすくて魂祭

小森谷正枝

加藤隆二特選

麦秋の真ん中父祖の墓残る 林 浩子  
金子千侍特選

菊人形弁慶も抱かれ退館す 杉山 鮎水  
河内一明特選

囀りや光の棒の滑り台 浅沼真規子  
北村風居特選

青空は微動だにせず原爆忌 小野寺恭子  
小菅白藤特選

噴水の芯になりたる女の子 林 信江  
中村仿湖特選

夏の雲未完成といふ厚さ 泉 風信子  
浜崎素粒子特選

炎天へ貨車一輛を突き放す 山田 裕康  
橋田勉特選

塙に透く柱歪めり敗戦忌 浅沼真規子  
東野鷹志特選

新聞社に遊軍てふ部署目借り時 稲村 茂樹  
古川京子特選

蒲公英の絮を吹く子に息を足し 上西 啓三  
牧ひろし特選

蝶生れて古墳は年を重ねけり 石井 博  
町山直由特選

包丁に水はしらせて寒鯉さく  
山本一糸特選

山田 裕康

梅雨晴間大きくゆれる象の耳  
山本千代子特選

山口 綱子

スイツチの汚れやすくて魂祭  
若井嘉津子特選

小森谷正枝

百合強く匂う丁寧語に疲れ

浅沼真規子

### 中村和弘主宰選

天 梅雨闇の金山廃坑常しなへ  
地 犬恋ひの空け者たり祭笛  
人 夏シャツの髑髏墨痕淋漓たり  
佳作 睦言も雛の言葉か金屏風

米川五山子  
浅見 玲子  
斉藤 悦子  
大信田つとむ

さくら咲く浄水場に砂の山  
白壁に煤網目なす早かな

小菅 白藤  
町山 直由

モームの椅子ワグナーの額囀りぬ  
遠花火ブリキの玩具握りしむ

吉本 宣子  
石川 信子

クローンめくモデル次つぎ花水  
郭公啼く明るい雨の降る寺院

小木曾あや子  
山田 裕康

炎天へ貨車一輛を突き放す  
セミ鯨の肋をくぐり土用太郎

山田 裕康  
小森谷正枝

噴水の芯になりたる女の子

林 信江

### 選評

#### 北村風居選評

青空は微動だにせず原爆忌 小野寺恭子  
原爆忌、終戦忌はよく作られ、今回の作品の中にもありますが、戦争は個人にとつても国にとつても大事件でありまして、これを詠むことは大変難しいが、この作者は個人的なことを超越したところで詠んでおられる。今日の日本の繁栄、広島の人々の復活への努力というものを材料に詠んでいる点で優れていると感動しました。

#### 小菅白藤選評

噴水の芯になりたる女の子 林 信江  
噴水の句は沢山あるが、「噴水の芯になりたる」の次に「女の子」をもつてきたところに新鮮さを感じました。ぜひ皆で学びたいところだと思います。今日のように俳句の氾濫する時代に一番大切なのは新鮮さで、その点を考えながらとらせていただきました。

大森女良夫選評

異次元に攫われたくて霧の野へ 小竹ヒサ子  
曖昧模糊とした霧は、現代の先の見通しのつかない不安感であり、いつそのこと異次元へ逃げ出したいという現代人の持つている心象風景であると思いました。

応募作品の中には優れた句もあり、うまくまとまっではいるが、新しさのない句が多かった。そうでなく今までにないようなものを求めたいと思つてこの句をいただいたわけです。

町山直由選評

包丁に水はしらせて寒鯉さく 山田 裕康  
「陸」の句を見ると、派手な句もあり理屈っぽい句もあり、ゴツゴツした句もあればやわらかい句もある。変化に富んで面白いが、どういふところに焦点を合わせるかによつて、特選の基準も変わってきます。この句には料理の手捌きや雰囲気も出ているが特に「水はしらせて」で、句に勢いが出た。作者の意気込み、勢いがすばらしく、共鳴しました。

中村和弘主宰選評

先程も申し上げましたが、俳句の既成概念が自分の中に溜つていくということに、特にベテランほど注意しなくて

はなりません。

選句にも「俳句めがね」をかけてしまう。その結果、おおよそ高句に名句なしという場合もあります。私が今日とりましたのは、順序が逆になりますが、

地 犬恋ひの空け者たり祭笛 浅見 玲子  
祭笛がとてもよくきいていて、こんな句は他にないんじゃないかな。作者の実感がこもっている。自分の犬が死んで空け状態のところへ祭の笛がなくさめるように聞こえてきた。自分を空け者と言っているが、人間誰しもそういう部分を持つていて、作者はそこを自覚している。また、どんな村にも一人や二人、ふだんは目立たないのにお祭の時だけ笛や太鼓で能力を発揮する人がいる。作者はその洞察力で、自分の内側と外側を同時に見ている。

人 夏シヤツの髑髏墨痕淋漓たり 斉藤 悦子  
これも類想がない。事実そのままなんだけれど、最近の若者がサイケデリックとかブラックユーモアとかいうか、ドクロなどの絵をTシャツにつけて、やや反骨を表わしている。墨で書いてしたたるような「髑髏」と「淋漓」という言葉が今日の時代を反映しているようだ。

天 梅雨闇の金山廃坑常しなへ 米川五山子  
金山の廃坑を見て人間が人間を使役する、その典型的なありようを見てとった。今、佐渡金山の跡へ行くと昔の働

く人を再現しているが、その残酷さが形として残して残してある。今日でも、見えないけれどそういう使役の形があるんだよとっている。作者の弱者に対する怒りと悲しみが「常しなへ」で表現されている。

私の特選は以上の三句で、どれも類想がない。どこへ出しても立派な句だと、自信をもって選句します。

### 応募作品入選句

高得点者表彰

5点 梅雨晴間大きくゆれる象の耳 山口 綱子

青大将山脈のごと通りけり 石川真木子

尺蠖の後押しをする眼かな 町山 直由

4点 新聞社に遊軍てふ部署目借り時 稲村 茂樹

塙に透く柱歪めり敗戦忌 淺沼眞規子

炎天へ貨車一輛を突き放す 山田 裕康

スイッチの汚れやすくて魂祭 小森谷正枝

噴水の芯になりたる女の子 林 信江

夏の雲未完成といふ厚さ 泉 風信子

蒲公英の絮を吹く子に息を足し 上西 啓三

言の葉の蝶となるまで音読す 大信田つとむ

クローンめくモデル次つぎ花水 小木曾あや子

大寺の柱に触るる暖かな 大類つとむ

### 吟行句選句発表

町山直由特選

大蟻の手話実方の墓の上 森下 賢一

小菅白藤特選

秋徴<sup>ついで</sup>雨孫太郎虫の由来読む 田中 櫻子

太秦女良夫特選

霧喰うて孫太郎虫太くなる 大石 雄鬼

中村仿湖特選

歌詠みの塚より洩るる秋の声 外崎 光秋

古川京子特選

天に蓋したき秋霖蔵王かな 大久保八千代

大類つとむ特選

大蟻の手話実方の墓の上 森下 賢一

大石雄鬼特選

巡礼のようににつらなり秋出水 若井嘉津子

若井嘉津子特選

歌碑重くかたみの芒に深く坐す 安藤 綾子

橋田勉特選

露草の色のこぼるる塚ひとつ 中村 仿湖

山本千代子特選

甲冑の綾目に沁みる秋の雨 中村 和弘

牧ひろし特選

狛犬の小暗き眼窩あかまんま  
米川五山子

浅見玲子特選  
すすき叢「をこ」の朝臣を振り返る  
上田 桜

高田廣稲子特選  
秋雨の塚の後ろにまわりみる  
田畑 剛

北村風居特選  
甲冑堂の冷気孝女の口うごく  
品川弥寿子

加藤隆二特選  
秋雨に朝臣の墓標棒一本  
斉藤 悦子

中村和弘主宰選  
天 蓑虫の鳴くや歌仙の塚濡れる  
中村 仿湖

地 すすき叢「をこ」の朝臣を振り返る  
上田 桜

人 枯尾花神輿の金はみ魂輝り  
杉山 鮎水

佳作 秋雨に朝臣の墓標棒一本  
斉藤 悦子

哀れ蚊の甲冑堂にて力尽く  
若井嘉津子

竹落葉踏んで朝臣の歌碑なぞる  
加藤 隆二

高野 槇野分の庭に聳てり  
高田廣稲子

ひこばえの生ふのみ秋雨烟る墓  
長谷川松琴

変らざりいなこの顔の前傾は  
森下 賢一

鈴の緒の絹の光沢豊の秋  
十亀カツ子

萩の露こぼして昏るる甲冑堂  
加藤 隆二

甲冑堂の白き顔泛く秋湿り  
永井 絹子

実方の墓へ口開く花オクラ  
大類つとむ

糸すすき白装束の女武者  
小林 政女

歌詠みの塚より洩るる秋の声  
外崎 光秋

土饅頭に走り根の筋ちちる鳴く  
十亀カツ子

床下に芥をためて萩の風  
永井アイ子

ぬかりたる古道に潜む秋の蝶  
田中 櫻子

### 吟行句選評

橋田勉選評

露草の色のこぼるる塚ひとつ 中村 仿湖

私も露草を見ておりましたが、露草の色と雨の中で露が

こぼれるのとの取りあわせが良く、矚目の句としてよくで

きていると感心していただきました。

大類つとむ選評

大蟻の手話実方の墓の上 森下 賢一

新しい新しいとよく言われますが、この句が新しいかと

いえばそうではないと思います。蟻が手を動かしている。

手話というのは音のない会話ですね。それが実方の墓の上

で行われている。何か実方と交信しているような感じです

ね。大胆な切れが真ん中にあり、難しい言葉を一切使わず

に的確に表現しています。

浅見玲子選評

すすき叢「をこ」の朝臣を振り返る 上田 桜

実方の墓と芒。その歌枕の史蹟にまつわる全ての故事をすっかりこなして詠んでいらっしやることに感心しました。実方の狼藉ぶりとか一条帝により都落ちさせられたにもかかわらず、行動を改めないで崇りにあつてしまふ。身から出た錆でしょうが、「振り返る」の措辞で実方への思いが表現されていると思います。

加藤隆二選評

秋雨に朝臣の墓標棒一本 斎藤 悦子

朝臣の終焉を悼む作者の心情が、俳句の骨法である「もの」と「こと」を配して鮮烈に表白されていると思いました。「秋雨」という季語の斡旋で印象が鮮明になりました。

山本千代子選評

甲冑の綾目に沁みる秋の雨 中村 和弘

昨日の感じがとてよく出ている。美しい甲冑というのは繊細な細工がしてあって、その胸のあたりに秋の悲しみが沁み入る感じがしてとても惹かれた句でした。

中村和弘主宰選評

今回この大きな会を取りしきって下さった宮城支部の方々、少ない人数で一生けんめいやって下さって、これだ

けの良い会にしていただき、皆を代表して御礼申し上げます。

吟行ではよく見ることが大事で、それにプラスして想像力を加えなくてははいけない。私のとった天・地・人の三句は、いずれも見たものをベースにして自分の想像力を足している。

天 蓑虫の鳴くや歌仙の塚濡れる 中村 仿湖

大変俳諧的である。みみず鳴く、亀鳴くなどと同じく俳人が作った季語で蓑虫は実際には鳴かないが、歌仙の墓を見たところで何かを感じる。蓑虫が象徴的に実方の姿にもなっている。リズムも整っていて、うまいなと思いました。地 すすき叢「をこ」の朝臣を振り返る 上田 桜

これも感心した作品です。「をこ」は古語で愚かなという意味ですが、なかなか面白い。「をこ」は漢字「烏訶」にした方がよい。実方はおろかな行動で都を追い出されるが、何か強くひかれるものがあって、「振り返る」に作者の情が出ている。客観的に突き放しているところがよい。

人 枯尾花神輿の金はみ魂輝り 杉山 鮎水

「み魂」まで言ったところがよい。秋のすすきの中で輝いて、ひよっとしたらすすきの中に人が消えてしまうような感じに感心した。見たものに自分の想像をつけ加えることが大切である。

### 高得点者表彰

- |     |                  |       |
|-----|------------------|-------|
| 第一位 | 狛犬の小暗き眼窩あかまんま    | 米川五山子 |
| 第二位 | 霧喰うて孫太郎虫太くなる     | 大石 雄鬼 |
| 第三位 | 鈴の緒の絹の光沢豊の秋      | 十亀カツ子 |
| 第四位 | すすき叢「をこ」の朝臣を振り返る | 上田 桜  |
| 第五位 | 甲冑の綾目に沁みる秋の雨     | 中村 和弘 |
| 第六位 | 秋雨に朝臣の墓標棒一本      | 斉藤 悦子 |

（以下略）

### 閉会の挨拶

橋田勉同人会副会長

稲村茂樹さん、浅沼真規子さんを中心に宮城支部の方々に完璧にご準備いただき、お世話になりました。心から御礼を申し上げてお聞きにしたいと思います。どうもありがとうございました。

### 主催者側挨拶

稲村茂樹大会実行委員長

この大会が滞りなく終わりましたのは、沢山の方々に作品をご応募いただいたこと、それから七十名近くの皆様のご参加のおかげです。また、昨日から今日にかけてお手伝いいただいたみなさん、宮城支部の皆様の骨身を惜しまない働きがありました。どうもありがとうございました。

—拍手—

### 俳句大会



主宰の「天」を戴く米川五山子氏



大会を運営された宮城支部の方々

## S F 中の科学

小木曾 あや子

はじめに

小木曾あや子でございます。三カ月ほどまえ稲村さんから陸の全国大会でS Fの翻訳の話をしてくれないか、というご依頼を受けました。みなさまのような俳句の大先輩たちのまえで、S F翻訳家といってもアルバイト程度の数しかこなしていないわたくしがお話するなんてとんでもないと思つて、お断りしたのですが、繰り返しお便りをいただきまして、中村主宰もいんじゃないかと賛成なさつてるし他に当てがありません、というお話でした。しゃべるのは得意ではありませんし、自分がかかっているS Fの狭い範囲の話しかできませんから、つまらない話になるんじゃないかと心配なんです。S Fの楽しさをご存じない方に、わたしの好きなS Fをご紹介します。興味を持っていただければいいと思ひなおしてお引き受けしました。

こんなに大勢の方のまえでお話するのはいつだったかなあと考えてみましたら、十年ほど前に児童文庫のお話会がありました。でも、そのときの対象が二歳から小学校三年生でしたから、今日とはだいぶ勝手が違うようです。

### 翻訳養成所のこと

「S Fのなかの科学」というもつともらしい題名にしましたけれど、どちらかというとならぬ裏話が主になるんじゃないかと思ひます。じつはこの題を思いついたのは、わたしが翻訳の勉強をはじめ、東京翻訳家養成所―いまはバベル翻訳学院という名になっていますけど、そこで最初にワークシヨップで仲間と翻訳した本の題名が「科学I N・S F」つまり、「S Fのなかの科学」というものだったので。この本は、S Fに書かれている科学は、どこま

で現実性があるかというようなことを科学的に検証した本でした。わたしには科学的な検証なんかできませんけど、とりあえず、その翻訳家養成所に通うようになったいきさつからお話したいと思います。

じつはわたしは子どものころからお話を書くのが好きで、小学生のときは童話を書いて自分で冊子を作るような子でもで、学生時代からずっと同人雑誌で小説を書いていました。ところが三十代のはじめに、それまで勤めていた教員の仕事をやめたんですが、主婦になったら暇かと思つたのに、小説が書けなくなつてしまいました。小説というのは自分を出さなければならぬところがありますので、家庭の主婦とは両立しないんじゃないかと思ひました。



というわけで、主婦らしくお稽古ごとをしたり、PTA

の役員をしたり、うちで子どもたちに英語を教えたりしていましたが、四十五歳のとき、新聞で翻訳家養成所の生徒募集の広告を見たらまた

物書きの虫が騒ぎ出してしまったんです。翻訳家というものが学校で勉強してなれるものだとは思っていなかったものですから、そんな学校があるということに興味を引かれました。それで新聞広告で翻訳のテストがあるのを見て、面白がつて応募してみました。こういう新聞に出るようなテストは客寄せですから、たいてい誰でも合格することになっていくんですね。ということはあとその通信教育の添削の仕事をやるようになってわかつたことですけど、そのときは合格したので喜んで、その学校の通信教育を取りはじめました。

わたしが勉強した翻訳家養成所のテキストは、文学作品の翻訳のためのものでした。受講生は未訳の文学作品の一部を実際に翻訳して提出するわけです。それが採点されて一年間の平均点が基準に達するとこの学校の資格がもらえます。一年やって資格を取つたあと通学コースも入れて、翻訳家の中田耕二さんとか越智道雄さんの教室に出ました。中田耕二さんという方はカリスマ的な先生で、大きな目でざろりと睨まれるのが怖かつたんですけど、ただの英訳と翻訳というものの違いをみっちりしこまれました。越智道雄さんは大学の先生で、自分は大学の図書室で辞書類を使えるからいいけど、あなたたちは辞書代にたくさんお金がかかる、それでも翻訳家としてお金が入らないかもしれな

いよ、と脅されたものです。そのときははずいぶん意地の悪いことをおっしゃる先生だと思っただけですけれど、この学校の修了者でプロになっている人は、おそらく五パーセント未満だと思いますから、今から思うと無駄なお金を使うなと、親切でおっしゃったのかもしれない。

### 翻訳は調べ物

確かに翻訳は調べる仕事なので、調べる根気がないとできません。そして辞書がたくさんあります。わたしの場合は、パソコンの辞書フォルダに、研究社のリーダーズ・ブラスという大きな辞書の他に、科学辞典や医学辞典などを入れています。インターネットはそこから取り出す辞書もあるし、訳語ではなくどういふものなのか調べるときにも使います。以前に買った天文学辞典や物理学辞典、ドイツ語やフランス語の辞書など紙の辞書もときどき使っています。そして言葉として分からないというよりもニュアンスとして分からない場合には、英米人に聞いたりします。それでも分からないときは、最近では作者に直接eメールで質問したりしています。まあ作者に聞くのが一番確実なんですけど、あまりたくさん聞くところがあると、こんな程度の人が訳をしているのかと作者が不安になるといけないので、日頃つきあいのあるアメリカ人や以前に会話を習っ

ていたアメリカ人に聞くようにしています。それでもはつきりしないときに少しだけ作者に聞くようにしています。それから専門用語は知り合いに訊いてわかることもよくあります。

以前に、ある有名な翻訳家の方が俳句の英語訳が出てきて困っていらしたことがあります。「友達と別れるときアイスクリームを食べた」というような内容の英文でした。みなさんどんな句がおわかりでしょうか？ わたしが「陸」に入りたてのころのことですけれど、調べてみましょうという、みなさんに伺ったのですがわからなくて、実家の母が、属していた「山火」という結社の主宰の岡田日郎さんという方に訊いてくれたんです。それで、草田男の「六月の氷菓一盞の別かな」という句だと分かりました。それを先輩の翻訳家に知らせると、大変喜ばれました。こういう風に、まわりじゅうに訊きまくるといふのが翻訳家の常識です。みんなおたがいに訊くことを恥ずかしくたりはしません。わからないことがないようにしています。

先ほどの学校でプロになるのは五パーセント未満だと思いますが、その五パーセントにわたしが入ったのは、いろいろな意味で運がよかったのだと思っています。その、運がよかった話を少ししたいと思います。

下訳者として

さきほどいきました「科学 I N · S F」というワークシヨップですけど、この学校のワークシヨップという制度は、資格を取って登録している応募者のなかからテストで十人ぐらい選んで、出版する予定の本の分担訳をさせ、チューターが指導をするという制度です。このワークシヨップは柴野拓美さんという方がチューターでした。この方は「宇宙塵」というSFの同人雑誌、宇宙の人ではなくて宇宙の塵と書くんですけど、それを主宰している方で、小松左京とか星新一といった作家を世に送り出した、SF界では有名な方です。

このワークシヨップは十人でやったんですけど、終わったあとに、柴野さんから自分の下訳をする気のある人はいないかと誘われました。それで地方でやっている方もいたので十人のうち五人が手を上げました。そして下訳者のグループを作って毎月会合を持ち、翻訳に携わるようになったのです。これが運のよかったことの第一点です。

一般の方は、下訳というものを具体的にご存じないと思います。下訳といっても上の訳者しだいでいろいろな形があるんです。あるロマンス物の訳者の下訳をした人に聞いた話ですけど、その人が一生懸命自分で工夫をした訳を出すと、こんなに自己流の訳をする必要はない、原文が

すいて見えるような訳をしてくれ、と訳者にいわれたそうです。つまりその訳者は面倒な辞書引きは下訳にやらせて、原文を読まずに下訳から文を練るタイプで、下訳は使い捨てだったんでしょう。それに対し柴野さんという方はもともと都立高校の数学の先生なので先生が身につけていて、下訳者を育てる気持ちのある方で、厳しいことは厳しかったです。大変面倒見のよい先生でした。

それでその先生に付いて短編の下訳やゲームの本の下訳をしているうちに、二三年してジュブナイル風のSFを、下訳ではなく共訳という形でやらせていただきました。下訳と共訳とどう違うかということですが、やることは同じです。違うのは自分の名前を出してもらえるかどうかというところ。翻訳をやりたい人は、本に名前が出るということが一番の目当てですから、共訳にして下さるというのはほんとにありがたいことでした。

そのあと柴野さんはSF翻訳家の勉強会にも紹介してくださいました。この会合は、一泊旅行で翻訳家同士の交流をする社交的な会で、ここで代表的なSF翻訳家にも紹介をしていただきました。英米人も来ていて質問もできるし、出版社の編集者も参加するので、こういう本を出したいとか売り込みもできるわけです。翻訳家というのは、自分の作品を持っている作家と違っていくらでも代わりがき

ますから、編集者に気に入ってもらい、懇意になるということがとても大事です。もちろん柴野さんぐらゐのベテランの翻訳家は、何人かの作家を受け持って、作家とも懇意になさっていましたから、そういう問題はありませんが。

柴野さんは日本のSFファンの代表のような人で、世界SF大会に十何年間、毎年奥様といっしょに出かけていらつしやいました。そこで作家とも友達になつたのだらうと思います。こういう旅行は仕事がらみなので、確定申告のとき必要経費に繰り入れることができます。確定申告といえ、このまえハリポッターの翻訳者でその出版社の社長をしている人の収入が、三年間で三十五億円とか新聞に出していましたけど、それは翻訳家の世界では特殊な例外ですから、そういう基準で考えないでほしいと思います。わたしなんか、一年に一冊のペースですから、確定申告で税金が戻って嬉しいくらいです。

たまに「ジュラシック・パーク」のように映画になると、本も売れて一冊で何千万とかいう話を聞いていますけど、そんなことはめつたになくて、みんなうらやましいなあなんて話をしています。わたしのように生活がかかつていない人は、呑気にやれるのですけど、専業の翻訳家はかなり大変です。締切に追われて、一年に六冊もやらないとサラリーマンの平均位にはならないと思います。だから、若い

翻訳家でもからだを壊す人も多いようです。

### 世界SF大会のこと

話が横道に逸れましたけど、世界SF大会というのはアメリカでやることが多いのですが、柴野先生について三年ぐらゐいたつた頃に、イギリスのブライトンという、熱海のような保養地ですけど、そこでやつたことがありました。わたしはイギリスに行きたかつたものですから、その開催地に惹かれて、下訳仲間の一人と世界大会に参加することにしました。この旅行は予約なしで湖水地方に行つて野宿寸前なんてこともありましたが、その話をはじめるとまた横道にそれますから、大会の話にしほることにします。

SF大会は五日間にわたつてブライトンのいくつかの会場で行われ、毎日参加者には無料の映画会もあるし、分科会とかパネルディスカッションとか作者のサイン会とかありました。なかにはSF絵画のオークションなんていうのもあつて、わたしたちも面白がつて展示されている絵の下に値段をつけておいて、オークションに参加したりしました。大会会場のなかで一番広いのは本の展示即売場です。あまりにも洋書がたくさんありすぎて、ちらちら見ても分からないんですね。結局何がいいのかわからなくて二三冊買っただけでした。いま思うともつたないことをしたと

思います。毎年大会に行っているような人や出版社の人は、本を買うのがひとつの目的のようです。

この大会でひとつ忘れられないのは、食堂でマキャフリーという女流作家と隣のテーブルになったことです。わたしたちが大会に来ている作家の噂をしていると、なんだか太ったおばあさんがじろじろこつちを見ているので、見直していると、友人が「あら、マキャフリーじゃない？」と言うんです。わたしは駆け寄って「ミセス・マキャフリーですか。あなたのファンです」と、声をかけて握手してもらいました。そうしたらあとで友人に、小木曾さんマキャフリー好きだったつけ、と笑われました。じつをいうとマキャフリーという作家のSFは、「歌う船」という本しか読んだことがなかったんです。にわかファンです。こういう作家に会えることも、世界大会に参加する楽しみのひとつだと思えます。

最終日の閉会式にはアトラクションの仮装大会があつて、凝った衣装で大勢が参加していました。スターウォーズのレイヤ姫とか異星人とか、何人も出てきました。そして大会の最後に発表されるヒューゴー賞というものがあります。これは大会の五日間のあいだに作家からファンまで参加者全員が投票してきめる、ファン投票の賞です。SF界では一番権威のある年間賞ですけど、のちにこの賞を何回も受

けたビジヨルドという作家がいて、その訳をわたしはいま担当しています。ところがそのブライトン大会には、まだデビューまえのビジヨルド本人も行っていません。そうなんです。このことを数年後にこの作家に会ったときに聞いて、なにか因縁のようなものを感じました。

ついでに申しますと、日本のSF大会もあつて、昨年は横浜で開催されたので一日顔を出しました。来年には世界大会が日本で開かれる予定です。日本SF大会の主催グループとか毎年世界大会に参加している人たちが中心になって、ハヤカワ書房とか東京創元社とか、SFに関わりの深い出版社が後援して行われるんだろうと思います。ただ海外の作家が来るので、翻訳勉強会のメンバーなんかも協力することになりそうです。

この翻訳勉強会には十年ぐらい毎年参加していましたが、最近では立ち消えになっています。下訳者ではじめた会のほうは、その後いろいろな人が加わって、毎月十数人が集まって、パソコンの情報交換をしたり、アメリカ人に翻訳の質問をしたりしていて、ずっと続いています。一昨年は二十周年を祝う会というのをやりました。でも最初下訳をやると言った五人のなかで、いま翻訳書を出し続けているのは三人になりました。そういうことも思うとわたしは運が強いとあらためて思います。

## ビジヨルドとの出会い

いま仕事が続いている三人のなかで他の二人と比べると、わたしは十五歳以上年上なので、普通ならもう仕事は来なくても仕方ないのだと思います。それがなぜ続いているかというと、それはビジヨルドとの出会いがあったからです。この作家のシリーズを訳しはじめてから十一作目が、この七月に出版されました。

ビジヨルド作品にはじめて出会ったのは紀伊国屋のペーパーバックの売り場でした。一人前になる前でしたから何か面白いものはないかと、本屋で探していました。ペーパーバックにはたいてい本の裏表紙に作者の紹介とか、批評とか載っているんですね。ふと手に取った本の裏表紙を読んでみたらとても好評でした。「面白くて十回も読みました」とか「こんな面白いのははじめてです」とか、書いてあったんです。これなら面白いかも、と思って買ってみました。その本が「自由軌道」です。

「自由軌道」という本は、宇宙の無重力空間の労働者として、足がなくて手を四本に人体改造されたクアデーという種族の話です。チンパンジーが木の上にいるところを考えていただくと、無重力では足よりも、つかまるための手が多いほうが役に立つというのはわかっていただけだと思います。ところがこの小説のなかではその後、人工重力

を発生する装置が開発されます。そしてこの種族は会社の方針で廃棄処分されることになります。この物語の主人公は、建設中の宇宙ステーションにクアデーに工法を教える教育係としてやってきた先生なんですが、廃棄処分という会社の方針に腹を立ててクアデーといっしょに反乱を起こす、という話です。

なかなかよくできた話だと思いました。それで柴野さんに相談してみると、まえに翻訳勉強会で知り合った東京創元社の編集者に話してみなさい、といわれました。編集者に話すと、ちょうどビジヨルドの別の本の版權を取ったところなので、そっちからやってみますか、といわれました。あとで「自由軌道」もお願いしますから、という話でした。タイミングがよかったんだと思います。これもひとつの運ですね。

そのとき渡された本は「戦士志願」といつて、ビジヨルドのデビュー作というか、最初に出版社に売れた三冊のなかの一冊です。この本は題名でもわかるように、軍隊ものです。でもスターウォーズのような戦争の話ではありませんでした。障害を持つ男の子の成長の物語なんです。それを訳しているあいだに、翌年「自由軌道」がネビュラ賞という批評家賞を受けました。これもヒューゴー賞と並ぶ権威のある賞です。日本ではSF関係の出版社はハヤカワ書

房と東京創元社が大きいのですが、賞作品はたいいハヤカワが取ってしまう。東京創元社では珍しいのです。だから創元社では喜んで本腰を入れてくれることになりました。

その翻訳中にわからないところがあって、私は図々しく、これは直接作者に聞いてみようと思つたのです。出版社気付でビヨルドという女流作家に質問状を出しました。返事が来るとはあまり期待していませんでした。ところが二週間ぐらいで、返事が作者から届きました。二週間というのはエメールで六日はかかったところですから、こつちから出した手紙にすぐ返事をくれたことになりました。びっくりするやら、うれしいやらでした。向こうも新進作家なので、遥かな日本のファンで自分の本を翻訳しているというのがうれしかったのでしょう。それからビヨルドとの手紙のやりとりが始まり、今でも続いています。

### アメリカにビヨルドを訪ねていったこと

たまたまそのころに、わたしの実家の弟がニューヨーク州の北のほうのイサカというところにあるコーネル大学に、交換教授制度で家族を連れて一年間留学していたんです。そこに母が一人で会いに行くといいました。もう八十歳ぐらいでしたから、一人で行かせるのは心配でわたしがついて行くことにしました。そしてついでにビヨルドに

会つてこようと思つたわけです。ビヨルドに手紙でそう知らせると、とても喜んで家族みんな来てくれ、ベッドはないけど、日本式に床にみんな寝ればいいから、なんて返事がきました。

ビヨルドはオハイオ州のコロンバス近郊に住んでいます。イサカからは、まずニューヨークまで飛んで、飛行機を乗り換えてコロンバスまで行きます。ビヨルドはイサカから車で来るのかと思つたんだそうです。それがアメリカ人の感覚なんです。空港まで迎えに来てもらつて、一晩泊めてもらいましたけど、とても欲待してくれました。当時は暮らし向きはあまり楽ではなかったようで、夫と小学生の子ども二人といっしょに小さなうちに住んでいました。リビングルームもからっぽの本棚にネビュラ賞のトロフィーが飾つてあるほかは何もないような部屋でした。そのリビングルームのソファ・ベッドで泊めてもらったんですが、シーツは清潔で糊はきいていましたけど、ひよつと見ると穴があいていました。そんな生活でしたけど、それまでに出た自分のサイン本をまとめて用意してくれていて、林檎園にも連れていってくれました。

というわけで「戦士志願」が出版される時、ビヨルドと会つたときのことをあとがきに書きました。それもよかつたらしくて、もちろん本が面白いからなんですけど、

書評はおおむね好意的で、よく売れて一時はイエス・ブックセンターの週間ベストテンにも入ったんです。文庫本ですけど、いまままでに十一回増刷をしています。それ以来ビヨルドとはずっと手紙のやりとりが続いていて、新しい本が出るたびに真っ先に送ってきてくれます。

東京創元社でもその後いろいろ賞を受けたこともあって、ビヨルドの本はみんな出します、とっているのので本が送られてくるたびに編集者に知らせています。そういうわけでわたしも仕事が続いているわけです。最近では彼女もわたしもパソコンになって、メールのやりとりをするようになりました。メールっていいですね。質問があっても、少なくとも翌日には返事がくるので助かります。

ビヨルドは、SF大会で選ばれるヒューゴー賞の長編賞を昨年までに四回受けていますが、四回というのは他にはハインラインという作家がいるだけで、三回の人はいません。四回はタントツの回数で、日本では熱烈な読者がついているんですけども、批評家にはそれほど認められていません。これはわたしの訳が悪いのかとも思いますけど、じつは日本では、ハード・SFと呼ばれるむずかしい物理学の理論をテーマにしたもののほうが評価が高いのです。ハードSFというのはハード・トウ・アンダスタンド、物理学的にむずかしくてわかりにくい、ってことです。前置

きが長くなりましたが、このへんでSFのなかの科学という話に入って、まずハードSFの話からしたいと思います。

#### ハードSFについて

ハードSFはわたしもハヤカワ書房で二冊翻訳していますが、そこに書かれた科学の半分位、あるいは三分の二くらいが本物で、残りが作家の創作です。そうなる翻訳家としては、どこまでが本物の科学で、どこからが嘘ものなのか判断しなければなりません。そのためには本物の用語を全部調べて、本物であることを確認しなければなりません。それが大変なんです。講談社のブルーバックスという一般向けの科学解説の文庫があるんですけど、それを何冊も買って読みましたし、ずいぶんてこずりました。なかには日本ではまだ定訳のない科学用語もあって、たまたま新聞の出版広告で関係のありそうな題名の専門書を見つけて買ったら、そのなかに専門家の訳語が出ていた、というようなこともありました。

わたしがハヤカワで出したハード・SFの一冊は、バクスターという作家の「虚空のリング」というんですけど、まるで宇宙旅行の案内書のような本で、太陽が最終的に赤色巨星になって太陽系の惑星がそのなかに呑み込まれてしまふまでの過程とか、宇宙中のあらゆる現象、たとえばさ

まざまな形の銀河とか超新星爆発とか宇宙ひもを訪ねていく旅とか書かれていて、ここには相対性理論や超ひも理論なんてものまで出てくるので、科学用語をしつかり押さえねばなりませんでした。

これは最終的には、物理学の専門家に用語のチェックをしていただいでから本になりました。この本のなかの科学は天文学と天文学物理学が主ですが、ほとんどが現在認められている科学事象で、小説の筋以外の創作の部分は太陽のなかに人工知能を入れるとか、宇宙の探訪といった点です。この本は批評家の受けはよかったです、さっぱり売れませんでした。こういうのは読者が限られているんですね。

ハード・SFの作家では、ホーガンという人も日本では人気があります。このホーガンには「星を継ぐもの」という傑作がありますが、月はどうしてできたか、という謎に取り組んだ小説です。最近、月の石の検証の結果、ホーガンの説が証明されています。こういうのがハード・SFを代表するものです。

SFのテーマで一番多いのは宇宙を舞台にしたものですが、宇宙テーマのものなかに、ニーヴンという作家の「リングワールド」という壮大な規模のものがあります。輪の平たい部分に山あり谷あり、さまざまな種族が暮らしている。しかもこれはある先進的な宇宙種族の手で人工的

に作られたというのです。この本では、地球からこの世界に行くには、電話ボックスのような形の転送ボックスというもので宇宙をひとつ飛びすることになっています。本自体は大変科学的な説明が多くて、リングワールドの解説も建設白書が書けるくらいに詳細なんです、わたしには転送ボックスというのはあまり科学的には思えません。なにかドラエモンのどこでもドアか、引き出しみたいな感じじゃないでしょうか。

同じ宇宙テーマでも、今年映画が上映された、「ソラリスの陽のもとに」は知性を持った水の惑星の話で、宇宙というものを哲学的にとらえたかなりファンタジーに近いものだと思います。わたしの好きな作家にブラッドベリという作家がいますが、その「火星年代記」も幻想的な宇宙ものであまり科学性はありません。一方、ロビンソンという作家の最近ヒューゴー賞を得た、火星三部作（赤い火星、緑の火星、青い火星）では、現代の火星探査を反映していて、火星を地勢形成して地球に近い状態にし植民する過程を書いていきます。

### ビジョルドのSF的小道具

さきほどいったハイラインもそうなんですけど、ビジョルドの特徴は素晴らしいストーリー・テラーだということ

とで、大がかりな物理学的な装置とか、ナノテクのような科学的な要素はどちらかというとなじめです。むしろひとつひとつの植民惑星の社会構造をしつかり作っていて非常に現実的なんです。そこで登場人物を活かしている点が評価されているのだと思います。わたしは未来史の大河ドラマではないかと思っています。もちろん舞台は地球を離れた銀河宇宙の宇宙ステーションとか植民した惑星ですから、宇宙関係の装置や道具は小道具としてたくさん出てきますし、宇宙戦争の場面では面白い兵器もいろいろ出てきますが、あまり科学的な解説はありません。ですから訳者としては楽ですし、それだから広い範囲の読者がついているのだともいえそうです。

たとえば宇宙船ですけど、ビジヨルドのシリーズのなかでは、近くの星には普通の航法で、遠くにはジャンプ航法というのを使って銀河宇宙のなかを数日間から数週間で旅行することになっています。こういうジャンプをワープということもありますけど、ビジヨルドの場合は、ワームホールを使うというところが独自なところですね。ワームホールというのは宇宙の虫食い穴と訳されたりしますが、「平坦な宇宙のあちこちにある、異なった宇宙の銀河に抜ける時空のトンネルのようなもの」と天文学辞典で説明されている事象です。もちろん確認されてはいませんが、計算上

で存在するものです。ビジヨルドはその物理学的な解説はせずに、それを使って旅行することを既製の実事として書いています。ワームホールを通り抜ける様子や、宇宙ステーションの内部の描写なんかは、いかにもそれらしくて説得力があります。想像の産物ですけど、まったくの力でめではなく、現在の宇宙理論を下敷きにしてるわけですね。この宇宙船を操縦するパイロットは、船と連結するための特殊な装置を脳に移植していて、額にソケットがついていることになっています。

兵器としては、しばしば出てくるのがスタナー。これは撃つても相手を気絶させるだけなので、とにかく撃つて気絶させ、あとから敵をよりわければいい、なんてことも書いてあります。スタンガンというのは現代でも使われていますから、その応用でしょう。殺傷力のある兵器はいろいろあるのですが、文明度の高い惑星では使用が禁止されています。警官なんかは、電磁波の投げ縄のような「拘束場」とか、「電撃棒」という犯人に電気ショックを与えて捕らえる警棒を持っています。

それから戦闘用の宇宙服「スペースアーマー」は、鎧のような宇宙服で手袋に兵器が組み込まれていますが、「戦士志願」の中では、このアーマーを着た敵を遠隔操作する装置を手に入れて、なかの温度をやたらに暑くしたり首を

ひよいとねじったりして敵をやつつける、という場面があります。そういう兵器で攻撃した状態が具体的にユーモラスに書かれているので、なかなかリアリティがあります。

ビジュアルという作家は、人体改造とかクローン技術とか毒ガスの後遺症とか人工子宮というような、生理学的な面の書き込みが多い作家です。人体改造では、さきほどお話しした「自由軌道」の四本手のクァデーという種族もありますし、男性性器と女性性器を兼ねそなえた両性者とか、スーパー兵士として開発された八フィートの身長的女兵士とか、テレバシー遺伝子を持った者なんてのもあります。

クローンもこのシリーズでは重要な役回りです。こういったものはおそらく倫理的な面で将来実現することはないかもしれませんが遺伝子操作からいえば、可能性は十分にあるものです。ミラーダンスという長編では、クローンを作ってからだを着替える、つまり脳を抜き取った若いからだのクローンに自分の脳を移植する話が出てきますけど、こういうことは一般の宇宙世界では違法であるとされている、無法地帯の惑星でだけ金持ちの注文を受けてやっている、ということになっています。

このビジュアルのシリーズの主人公は、母親の胎内にいるときに、毒ガス攻撃を受けて碎けやすい骨という後遺症をもって生まれてきた若者です。その骨が折れるたびに人

工骨に取り替えると書かれています。これは現在の金属を入れる手術と違って、なにか人体に融合するようなプラスチックのようです。この主人公はのちに胸にニードル手榴弾の直撃を受けて、心臓や肺が切り裂かれてしまっています。それでもその遺体は冷凍保存されていて、本人の体細胞から合成した新しい心臓や肺を手術されて蘇生するのです。

こういう手術は、現在の医療で行われている万能細胞の実験や心臓移植手術の未来像ともいえるでしょう。現在のサイボーグ技術は想像以上に進んでいて、先日NHKの番組でやってみましたけど、脳から直接情報を送る義手もあるそうですね。死人の臓器を取り替えて生き返らすなんて、荒唐無稽な、と思われるかもしれませんが、こういうことも将来は現実になるのかもしれない。

### SFは未来小説

SFは未来小説ですが、SF作家は未来に対して楽観的な人と、悲観的な人に分かれます。ビジュアルは楽観的なほうです。だいいちビジュアルの本には異星人が一人も出てきません。人類だけしか、銀河宇宙にはいないという設定になっています。それはちよつと都合がよすぎるのではないかとわたしは思うのですけど。もつとも宇宙の時間のなかでは地球の千年なんて一瞬のようなものですから、

その時間が他の知的生命体の時間帯とずれているということとはありうるかもしれませんが。

ビヨルドの「親愛なるクローン」という小説は、西暦三千年ころのロンドンを舞台にしていますが、ロンドンは海の水位が高くなったため、まわりに高い防潮堤を築いているんです。防潮堤の水位の調整をするポンプ室を舞台にした、敵の惑星のスパイとの攻防戦の物語です。温暖化の水没の不安というものを、ビヨルドはそういう形で解決してみせているわけです。

同じ水没の扱いでも悲観的な小説というと、小松左京の日本沈没ということになります。これは日本がすっかり水没するという極端な設定になっています。ところがSFとしては、小松左京の日本沈没は地殻変動の転換期を科学的に論議しているハードSFです。ここに書かれた地球物理学の理論は修士論文級だといわれています。悲観的といえば、クラークという作家の「幼年期の終わり」では、人類がまったく違う進歩した新人類に取って変わられるという結末になっています。これは希望の持てる未来だといえるのか、いまの人類は滅亡するという悲観論なのか、どっちでしょうか。

タイムトラベルや異世界もの

SFのなかには時間をテーマにしたものもあって、タイムトラベルはインシユタインの時空連続体理論で可能性が示唆されていますけど、小説は幻想的で面白いものが多いろいろあります。シルバーバーグという作家の、「時間線を遡って」という本は、キリストの処刑の時間に立ち会う旅行ツアーが組まれるという話です。主人公は何度もそこへ行くうちに、いつのまにかキリストの立場に入れ代わってしまふんです。

ハインラインの「夏への扉」という本も愛読者の多いものですが、これは冷凍睡眠とタイムマシンを使って時間を行ったり来たりする物語です。現在過去未来を行き来するというのは、わたしたちに共通した夢想じゃないでしょうか。過去に戻って現在の不満なところを直したい、という気持ちには誰にでもあると思います。

ところがタイムトラベルというのは、「バック・トゥ・ザ・ヒューチャー」という映画でもいわれていたように、因果律というものにひっかかります。つまり未来の人間が過去に影響を与えると、その結果未来が変わってしまうので、もしかしたら自分の存在がなくなってしまうかもしれない。というのが因果律です。ですから、おそらくタイムトラベルというのは、将来も実現しないだろうとわた

しは思っています。

SFには異世界ものというのもあって、「ガリバー旅行記」が元祖といえますけど、SFというよりはファンタジーといえるものが多いようです。SFらしいものでは、ある時点から宇宙がふたつに分かれてしまった、多元宇宙ものなんていうものもあります。向こうの宇宙ではヒットラーが世界征服しているとか、ネアンデルタール人が人類に代わっているとか空想は多彩です。宇宙がどうなっているのかは、いまはつきりとはわかっていないので、空想の余地があるでしょう。

わたしがハヤカワで翻訳したもう一冊のハードSFは、平行宇宙と行き来する話で、これは物理学者の書いた本なんですけど、実験の途中で間違つて実験室の一部分ごと平行宇宙に行ってしまう筋書きです。こういう平行宇宙が実現可能かという、理論的には計算できるとしても実際には疑問です。ハード・SFといっても壮大な道具立ての解説がいかに科学的なだけで、実現の可能性となるとピジョールドのほうはずっと現実的だとわたしは思います。ピジョールドは現実的すぎるので、批評家に軽く見られているのかもしれない。

みなさまもよくご存じのジュール・ベルヌという人は、SFの父なんていわれていますけど、彼の書いた本は、

「月世界へ行く」とか「海底二万里」とか、当時としては荒唐無稽なものだったのが、いまではほとんどそのまま実現しています。没後九十年たつて出版された「二十世紀のパリ」という小説では、人々は毎日地下鉄で通勤し、富のみを追求して、ファックスのような装置で連絡を取り合う、という味気ない生活を書いていて、書かれた当時は、編集者があまりにも暗く荒唐無稽だと考えて没にしたのだそうです。それを考えると何が将来実現するか、現在のわたしたちには予測できないのかもしれない。

こんなふうにSFと一口にいってもさまざまですが、わたしはあまり重いものよりはピジョールドのようなユーモアのあるものが好きなので、この作家の本を翻訳するのはほんとに楽しみです。翻訳していると、時間を忘れて夕食の支度が遅くなったりしています。本日は手前味噌の話におつきあいいただいて、ありがとうございました。

(講演より編集部にてテープお越し後、小木曾あや子氏の校正を経て掲載しました。また当日お時間がなく講演できなかつた部分を加筆しています。)